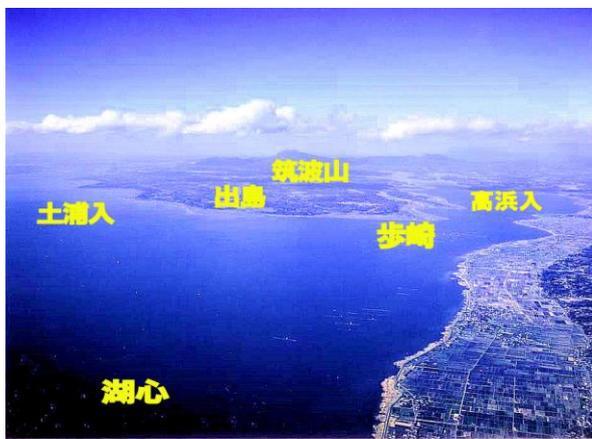




進修同窓会 HP にアクセス



「西浦湖心(三叉沖)上空から西を望む」  
(霞ヶ浦環境科学センター『霞ヶ浦への招待 霞ヶ浦のすがた』)

## 霞浦の月1 ～湖心に澄むや月の影……～

日本では、桜花が春を月が秋を代表する景物となっていますが、土浦中学(現土浦一高)校歌の作詞者堀越晋(中11回)も、その2番で、「蘆(あし)の枯葉に秋立てば 渡る雁(かりがね)声(こゑ) 湖心に澄むや月の影」と霞ヶ浦の秋の月を詠っています。

敬称を略し、引用文中の旧字体は新字体に改め、筆者による注記を【 】内に付け加えました。

なお、歌や句の口語訳は、竹井茂雄(高19回)が担当しました。

## 湖心

霞ヶ浦は、もと入り江であった所が残ってできた海跡湖で、現在、わが国第2の大きさをもつ淡水湖となっています。総面積は220km<sup>2</sup>で、西浦(172km<sup>2</sup>)、北浦(36km<sup>2</sup>)、外浪逆浦(そとなさかうら)(6km<sup>2</sup>)、常陸利根川(6km<sup>2</sup>)の4つの水域から成っています。「霞ヶ浦と北浦」などと表現される場合には、「霞ヶ浦」は、「西浦」のみを指しており、「霞ヶ浦」という名称は、2つの意味で使われています。周囲(水際線延長)は、日本一大きい湖である琵琶湖(235.0km)を超える長さです。



「霞ヶ浦湖沼群」  
(霞ヶ浦環境科学センター『霞ヶ浦への招待 霞ヶ浦のすがた』)

## 名称の変遷

「霞ヶ浦」には、古くは統一した名称はありませんでした。『常陸風土記』では、

霞ヶ浦のそれぞれの水域を太平洋に近い方から、「若松浦(銚子浦)」、「浪逆浦」、「鹿島の流海」、「香取浦」、「榎浦(えのうら)の流海」、「信太(しだ)の流海(稲敷市側)」、「行方の海(行方市側)」、「佐賀の流海(かずみがうら市東部)」、「高浜の海(高浜入)」と呼んでおり、その全巻を探しても、「霞浦」という名は見えません。「流海(ながれうみりゆうかい、うみ)」とは、海水が流動しているところから、このように言われたものと思われま。

平安時代以降、霞ヶ浦は鹿島灘の「外の海」に対して、巨大な入り江・「内の海」と呼ばれるようになります。鎌倉時代の天台宗の僧仙覺(1203?)常陸の人。『万葉集註釈』(通称『仙覺抄』)を著し、万葉集の本格的校訂を初めて行い、また、従来の無点歌の百数十首に新点を試み、古典研究の方法的基礎を確立した。『常陸の鹿島崎と、下総の海上とのあはひより遠く入りたる海あり、風土記にはこれを流海とかけり、今の人は「内の海」なん申す。』と記しており、また、北畠親房(1293~1354)も、『神皇正統記』に「常陸の国なる「内の海」に着きたる船」と記述していますので、「内の海」が、一般的な名称であったようす。

しかし、平安時代末期から鎌倉時代の和歌の世界では、「霞の浦」・「霞浦」という名称が使われるようになります。「霞の浦」・「霞浦」は、藻塩(もしお)を焼く名所・景勝地として世に知られ、歌に詠まれるようになります。

「春来ては あまのもしほの 煙まで 霞の浦の名にやたつらん」 雅家『新統古今集』  
(春が来ては、霞ヶ浦湖畔から立ち上る、漁夫が塩を製するために燃す火からの煙までもが都の人々の間では、「霞ヶ浦」や「霞の浦の藻塩」に係る噂となっているのであろうか。)

「ほのかにも 知らせてしかな 東なる 霞の浦のあまのいさり火」 順徳院『新後拾遺集』  
(ちよつとだけでも、都の人々に知らせたいものだなあ。東国にある、霞ヶ浦の、夜に漁船

で焚く篝火とそれが湖面に映る、幻想的な美しさを。)

「しらなみの あとこそみえね 天の原 かすみの浦にかへるかりかね」土御門院『新後拾遺集』  
(白波が立った跡などは全く見えない、極めて穏やかな霞ヶ浦の、広々とした上空に、蜻(ねぐら)を目指して帰って来た雁行が見える。)

多数の歌に「霞の浦」が登場していますので、「霞の浦」は、都人に広く知られていたと思われる。大宮人たちは、霞ヶ浦を実際に訪れたわけではありませんが、「歌合わせ」などで歌を詠み合う際の知識として、各地の歌枕や名所を知っており、その知識を競うように詠んでいました。いずれの歌も、霞の棚引く波の静かな湖の風情を詠み込んでいます。には、感心させられます。

「霞浦」の音読み「かほ」は、西浦の雅称とされ、本校の校歌にも、「終古渝(か)はらぬ(注)霞浦(かほ)の水」とあり、市内東崎町(現中央2丁目)にあった霞浦劇場も「かほ」劇場と称していました。

近世に入ると、「霞の浦」は「霞ヶ浦」と呼称、表記されるようになります。これは、「の」を「が」に置き換える関東訛りによるものと思われ(「桜の丘」が「桜ヶ丘」に、「小松の丘」が「小松ヶ丘」になるなどと同じ)。

## 注)藻塩

海藻を簀の上に積み、潮水を注ぎ掛けて塩分を多く含ませ、これを焼いて水に溶かし、その製塩法。こうして塩作りの事実から、霞ヶ浦が、まだ鹹湖(かんこ)塩水湖、湖水の塩分が、1リットル中0.5グラム以上の湖であったことが分かる。

## 注)渝はらぬ

「渝は、水がある状態から他の状態にかわるの意から、一般に、変わるの意を表わす。霞ヶ浦の水を詠っている校歌では、「変」ではなく「渝」を使っている。作詞者の堀越晋は、4年次に作詞したが、最初から「渝」を使っていたのか、作曲・補筆の尾崎楠馬先生が差し替えたのかは不明である。

# 秋の月

太陰曆(旧曆)では、7月(孟秋)・8月(仲秋)・9月(季秋)が、秋です。月の満ち欠けを基準にした旧曆の日付は、その時々々の月齢にほぼ対応します。月の半ばである15日は、だいたいにおいて満月になります。十五夜の月は即ち満月と考えられるようになります。名月と言え、旧曆8月15日(中秋)の月を指すようになります。

月の観賞は、中国から伝えられた行事で、日本では、9世紀末頃から、宮中で月見の宴が行われていました。秋は、空が澄み渡り、月の高度も程良く眺められる季節なので、月を楽しむ習慣が続いているのでしよう。古人たちは、秋の月を眺め、歌や句を詠んできました。

「今来むと言ひしばかりに 長月の 有明の月を待ちいでるかな」 素性法師『古今集』  
 「今すぐに行くよ。」とあなたが言ってきたばかりに、それを真に受けて、旧曆9月の長い夜を待ち続け、有明の月が出るのをとうとう待ち明かしてしまつたことだ。」

「月みれば ちぢにもものこそ 悲しけれ わが身一つの 秋にはあらねど」 大江千里『古今集』  
 (月を見ると、心がさまざまに乱れて物悲しいことだ。自分だけに来た秋ではないけれど。)

「秋風に たなびく雲の 絶え間より もれ出づる月の 影のさやけさ」 左京大夫顯輔『新古今集』  
 (秋風に吹かれて棚引いている雲の切れ目から、漏れ出る月の光の明るく見えることよ。)

「名月の 花かと思えて 棉鳥(わたばたけ)」 松尾芭蕉『続猿蓑』  
 (一面の綿畑に名月が輝いている。綿の実がはじけて白く吹き出しているさまは、月光を浴びて、まるで花が咲いているようだ。)

「ひとつ家に 遊女も寝たり 萩と月」 松尾芭蕉『おくのほそ道』(市振)

(同じ宿に、思いがけずも、隠遁者の自分と若い遊女とが、泊まり合わせるようになった。庭には萩が咲きこぼれ、澄んだ月の光が照らしているが、萩と月との組み合わせには、遊女と自分との取り合わせとどことなく通うものがあるようだ。)

「名月を取つてくれると泣く子かな」 小林一茶『おらが春』  
 (背負われた幼子が、大空に皎々と輝く満月を指して、お月様を取つておくれ、とねだっていることだ。)

電灯が普及する以前の夜は、今よりずっと深い闇に閉ざされた世界でした。そんな夜空に輝く月の光に、古人たちはいろいろな思いを抱いてきました。中でも秋は、思索に耽る季節、悲哀の時季と感じられていたため、秋の月を眺め、物思いに耽る歌が多く詠まれています。「秋の月」を静かに愛でる思いは、今でも日本人の心に根付いています。

## 霞浦の月

江戸後期の浮世絵師歌川広重によって描かれた、錦絵による名所絵「浮世絵風景画『近江八景』が、1834「天保5」年頃、版元保永堂によって刊行されると、これが契機となつて、日本各地で「○○八景」が選ばれるようになりまし。

土浦でも、沼尻墨遷(1775~1856)、如蓮(神龍寺二十世住職 褒祥大寅大和尚 1785~1858)、内田野帆(1781~1855)、色川三三(1801~1855)、川田幸枝(1783~1845以降)などが担い手となつて、「土浦八景」が選定されました。霞ヶ浦の月は、「霞浦秋月」として選ばれ、彼らは、次のような作品を残しています。

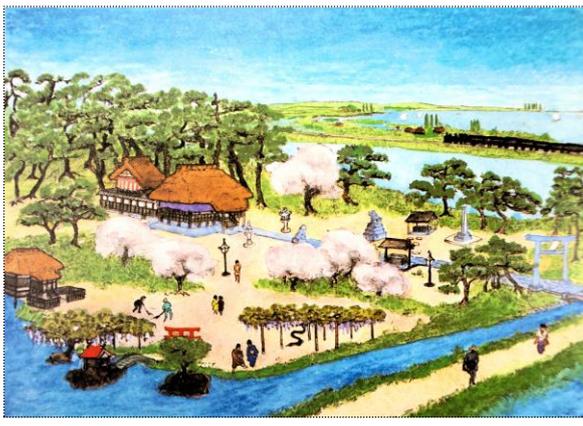
「あきかぜに かすみかうらの 雲はれてくまなからず 月のさやけさ」 色川三三(霞ヶ浦上空の雲は、秋風に吹かれて散り去り、辺り一面の全てを照らし出している、月の明るさであることよ。)

「うらの名の 霞もきりもたゞされば わきて さやけし 秋の夜の月」 川田幸枝  
 (湖の名は「霞ヶ浦」であるが、霞も霧も立ち籠めていないので、とりわけはつきり明るく見える、秋の、今宵の月であることよ。)

「月や澄む 浦を霞みと呼ながら」 沼尻墨遷  
 (上空の月は澄み渡っている。その下の、満々と水を湛える湖を「霞み(ヶ浦)」と呼んでいるのに。)

「是とても 春ハ霞むか 浦の月」 内田野帆  
 (秋の今宵には、はつきり明るく見える月であっても、「霞ヶ浦」という名のとおり、春には霞が掛かるのだなあ、霞ヶ浦に昇る月よ。)

このような、月を眺める習俗は、庶民の間にも広がり、霞ヶ浦沿岸の庶民は、二十三夜(にじゅうさんや)などの年中行事の中で、霞ヶ浦の月を愛でるようになりまし。高11回佐賀純一は、『霞ヶ浦風土記』(文・佐賀純一、画・中27回佐賀進)「第四章 町の暮らし」【第二十四話】水辺の子どもたち 久松こうさん(明治四十四年生まれ 土浦市東崎 昭和四十七年採録)の中で、三夜様(二十三夜講)での月見の様子を次のように記録しています。



「明治中期の鷲宮神社」  
 (『絵と伝聞 土浦の里』 文：高11回佐賀純一・画：中27回佐賀進)

「お月様で思いだしたんですけど、十一月二十三日は、霜月三夜といつて、月がとてもきれいなんです。それも湖の上を、それこそふうわりふうわりとゆれゆれ上がるって言われている。だからこのあたりの人は、この日になると十一時頃まで寝ないでね、『三夜講だから拝みに行こう』なんて誘い合つて、みんな驚の宮【神社】の【小】山に集まつて、月の出を待つていたんです。とーつても寒いんですよ、この頃はみんなどてらだの、綿入れ筒っぽう【筒袖】を着たりして、山の上で待つていたんです。そうすといつもの月と違つて、霜月の三夜様って言うのは、どういふかげんか、ゆれゆれ上がつていくんですよ。湖の上をね私も子ども頃から毎年拝みに行きまして、それからしばらくして月の頭がちらつと見える。ああ、お月様だ、と目を大きくして眺めてみると、たちまちどんだん上がつて、湖に光が映つて、それは何とも言われない美しさ。冬ですから空気が澄んで、月が常にもまして神々しい。東崎の人間はその姿をみんなして拝んで、高くなるまで眺めていました。帰るのは十二時すぎでからでしたね。」

### (注) 二十三夜

旧曆23日の夜、即ち二十三夜に、講員が集まつて、飲食をともにしながら月の出を待つ風習。三夜様とも三夜供養とも言い、月待行事の中でも最も盛んな行なわれた。月待のモチは、神の傍らに待座する意味らしく、この夜には、神の示現があると信じられていた。講員は、村の小学、村全体、任意の者などを単位としていたが、女性に特には嫁仲間で結成されることが多い。地方によっては、二十二夜を女性、二十三夜を男性の集まりとする所もある。二十三夜の月が出が遅いので、当番の家に集まつて、簡単な酒肴(しゅご)を、前の夜もやま話をして待つ。二十三夜講のある所では、二十三夜塔という記念碑を建てている例もある。

### 参考文献

「霞浦の今昔」(文学上より見たる霞浦)長南倉之助(本校旧職員)『郷土史研究論集』所収  
 (高21回 松井泰寿)